

---

# 彼女。

廣瀬 るな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女。

### 【Nコード】

N8989D

### 【作者名】

廣瀬 るな

### 【あらすじ】

尊大で利己的で、そのくせナイーブ。頭と軀がまるで一致しなくって、大切にしたいのに壊してしまう。そんな少年期の不条理な恋の話。

## プロローグ（前書き）

セックスの描写が有ります。苦手な方は御退出願います。

作風が エゴン・シーレ。かなり寒いです。

また、L e f t A l o n e 及び P a i n の別の側面になります。内容の重複をご容赦ください。

こちらだけでお読み頂いても分かる内容になっていると思います。

## プロローグ

俺たちの、いや、俺の10代は青かった。

正論を吐きながら自分の事ばかり考えて生きていた。

それが正しければ他人を傷つける事なんか二の次で。

街ですれ違う高校生達。ふざけてはしゃぐ姿は今の俺から見ると子供の様に思うのだけれど、その当時にしてみればいっぱしの大人気取りだったと恥ずかしくも思う。

世の中の事が分り始め、大人の言動に欺瞞を感じ、どうやって生きていけばいいか考えられる様になり。それでも自分が選択した道は決して間違いではないと。

いつだって中心は自分だった。

他人の痛みを分るような気持ちになって、そのくせ色は白と黒しなくて。

相手の立場になって考えているつもりが、どうしようもないってことが有るってことに気づかず、俺である事だけを通し続けた。

俺はあの頃から変わる事が出来たのだろうか。

もしかしたら自分が思っているより変化は無いのかもしれない。

それでも今の俺はこの現実を生きている。

どうすれば良かったかなんて、今更言っても始まらない。過去は変わらない。それでも過ちから学ぶ事が出来るってことは身にしみてよく分った。

俺は二度と間違いたくはない。

本当に大切な唯一つ、それを過たない様に。

彼女。

本編へ

つづく



## 第一話 恋人（前書き）

いろいろな意味で生々しい描写に力を入れています。  
苦手な方は絶対に入らないでください。

## 第一話 恋人

確か亜由美と別れたのは3月に入ってすぐの晴れた日だったと思う。

「ねえ基<sup>もと</sup>、大丈夫、今日、安全日だよ。」

そう彼女が言ったから。

その日に限って俺はゴムのストックを切らしていて。だから諦めかけていた時の事だった。

一気にテンションが下がった。

その事の意味を考えもしない彼女に無償に腹が立ち

「もし出来ても、俺、産んでなんて言わねえぞ。」

威嚇のつもりで顔を近づけ囁いていた。俺たちは高校生でお互い責任なんて取れないんだから。だから、いい加減にしろ、と。

そのとき思い出したのは以前抱いていた女の事だった。

彼女ならば絶対そんな事言わないはずだ、と。

彼女とする時はいつも俺の部屋と決まっていた。

その日もいつもの様に静かに横たわる彼女にキスしながら、ベッドの脇にいつも有るべきものを探した。

「無いや・・・。」

そう言えばこの前した後、買い足しておくのを忘れたんだ。

この時俺は駄目モトで聞いてみた。どうせ彼女の生理は2ヶ月に一回有るか無いか。おぼろげな知識でそれが不妊体質の兆候だって知ってたから。

「今ってさ、安全日だったよな。」

彼女は一瞬きよとした表情になった。この時の俺は期待している顔をしていたんだと思う。そこをドンピシャのフックでぶん殴られた。

「やらせるはずねえだろう、この馬鹿が！」

彼女は起き上がると痛んだ拳を握りしめ、

「俺、妊娠するのも嫌だし、堕ろすのも嫌だからな。」

そう低く吐き捨てた。

あ、そうかって。こいつにかかると俺はいつまでも子供だ。セックスして射精すりゃ妊娠する。そんなのは当たり前だと分っているけど、それが現実世界でどう言う意味を示すのか、俺にはちっとも分っていないかった。

「ご免。」

正直怖かった。

もし出来て、彼女と一緒に産婦人科の門をくぐり、診察室で待つ。こいつの態度は目に見えていた。

「どう考えても産めませんから。」

そう言って拳を握るんだ。

保健体育の時間に見せられた堕胎される胎児のエコー映像が俺の頭の中に浮かんた。殺さないでくれと言わんばかりに逃げ惑うあの姿を。女の勇利ユリはそれをリアルに自分の中で再現できるんだって感じた。

「今から買いに行くから。」

なんて言えなくて。

「ご免。」

そう言っただけで彼女を玄関まで見送った。

「そんなつもりじゃなかったんだ。」

そういいながら

“そんなつもり”

ってどんなつもりか言い訳を考えた。

「思ってもいないくせに。」



彼女は俺に聞こえる声で呟いた。

殴られた左の頬がじんじんと熱かった。

その彼女と比べてしまい、余計に目の前の亜由美に腹が立ち

「もう、駄目だよ、俺たち。」

本気で嫌になりそう言っていた。

「合わないんだよ、何もかも。俺はやらなきゃいけない事が有るのに、お前は俺の事縛ろうとするし。今度は避妊無しでもいいなんて、おかしいよ。俺も子供だけど、お前、女だろ？できて困るの、お前なんだからさあ。もう少し大人になれよ。」

すると彼女はぎゅっと唇を噛み締め、何も言わず服を直した。

「別れよう。」

タイミングを見て言い、素直に頷いた彼女にほっとした。

亜由美から告白されて付き合い始め3ヶ月に入ろうとしていた。

短いようで長かった。

確かに彼女は可愛くて素直でそれなりにわがままで。男にとって理想的な女の子だったと思う。でも俺の中では何かが違っていた。彼女といるときより、勇利といえる時の方がもっと俺が俺らしくいれる、そんな気がしてならなかったから。だから彼女とは潮時だったんだ。

彼女は送ろうとする俺の手を振り払い、

「比べないで！」

そう言って出て行った。

俺は彼女の言っている意味がよく分った。と同時に、それが亜由美にばれていたらって事に愕然としていた。

彼女。

つづく



## 第二話 親友（前書き）

ドン引きの予感がある人は、直感に従われての御退出をお勧めします。

## 第二話 親友

その頃の俺は拳闘部に所属していた。高校に入ってから始めた口だったが、自分で言うのもなんだけど2年に上がる頃にはそれなりのものになっていたと思う。

それというのも、全て勇利のおかげだった。

彼女は物心ついた時からのボクシング狂で、三度の飯よりボクシング！と言ってはばからなかった。入学したその足で、ボクシングやろっかなあ、なんて漏らした俺を引きづり二人入部届けを出していた。

それ以来の付き合いだ。

彼女の夢は、自分の手で有名なボクサーを仕上げる事。

そして俺はマネージャーの彼女に従い、ひたすら練習を重ねた。

二人三脚の日々だった。

女の名前が

“ 勇利<sup>ユリ</sup> ”

なんて、変だろう？あいつの本名は

“ 山口 遊里<sup>ユウリ</sup> ”

って書いた。その意味を知らないヤツっているのかな。歓楽街、風俗街の昔の呼び名さ。

あいつの言葉で言うと

“ ソープランド山口屋 ”

になるそうさ。だから、嫌だと。

さすがに男の俺でも引いたさ。自分の名前が

“ 間男 ”

とか

“ 色魔 ”

ってのと同じレベルだと思うから。

彼女はテレビの話でもするかのように何気なくその事を教えてくれた。学校の許可ももらい通称名を使っているのだと。確かに高校の名簿は

“ 勇利 ”

の名前で統一されていて、彼女が話さなければ俺はその訳をずっと知らずに来ていたと思う。

俺はなんて声をかければ良いか分らず戸惑い、勇利は反対に済まなそうな顔をした。だから

「いいじゃん。」

なんとか言葉をつなぐ。

「勇利は勇利だ。他の誰でもない。」

そう言っただけは立ち上がった。

部の開始時間が迫っていた。

彼女は学校での私服も仕草も気質もまるっと

“ 男 ”

だった。その上元が綺麗な顔をしているから、ジャニ系といわれれば正にそれだ。

もちろん性別が女である事には変わらないけれど、変わり者の多い学校だったのでそれなりに受け入れられていたと思う。

カットハウスのモデルで切ってもらったというかなり短めの髪を、長くて似合わないからとクラスの女の子に手直ししてもらって喜んでいたり。

応援部の演習に参加していて

「声、小っちゃえんじゃねえの？」

なんて怒号がまじたり。

身長も165cm ほどだったから女としては大きい方だ。

でかい声で明るく笑い、もちろんスカートなんか一度もはいた事が無かった。

ボクシングに関しては抜群に優秀な彼女は1年の時からトレーナ

ーを兼務していて、俺たちにハードなトレーニングを提示して来た。それでも誰も文句を言わなかったのは、選手とほぼ同じ量のロードワークを彼女自身、一緒にこなしていたからだ。細い割には筋肉質の体。彼女は俺たちの集団の中に違和感無くとけ込んでいた。

俺たちは性別に関係なく親友だ。そう信じていた。

その関係がある時を境にバランスを崩す事になる。

それは新人戦で勝ち残り、浮かれまくっている時に起きた。

ブロック大会の決勝の相手は畠山孝之という優勝候補で、こいつの事は練習の時に勇利からの情報でしっかり聞いていた。責め方、苦手な技、疲れて来た時の癖なんか。どうしてそんなに詳しいのか不思議だった。

「まあな、実は昔の知り合いなんだよ。」

彼女は曖昧に笑った。その時は特に気にせず、さすが勇利だと思っただけだった。

そして決勝は接戦だった。ぎりぎりの判定だ。だから勝ちが決まった瞬間、俺は勇利を抱き上げ喜んでいた。

みんなからの祝福の拍手。右の拳を突き上げ、俺たちはガッツポーズを作った。

試合が終わり俺は控え室へ。それからふと思ひ立ち勇利を探しにいった時、その声は聞こえた。

「今でもダツチワイフしてんの？」

男の声は切羽詰まっています。

もみ合う音に痴話げんかだと思った。関わる気なんか無かったか

ら、俺はきびすを返したはずが

「孝之<sup>たかゆき</sup>には関係ないだろう。」

それはまぎれも無い勇利の声で。

慌ててコーナーを曲がったそこには、畠山に被い被さられた勇利がいた。

その時は彼女を引きずり出す以外考えられなくて、問いつめる事は出来なかった。

でも、その悶々とした気持ちは溜まっていき、どうしようもなく膨らみ、そしてある日彼女の方から声をかけて来た。

「大事な話しがある。」  
と。

結局こういう事だ。

彼女とあいつはただの知り合いってんじゃなく、ヤツてたって。そう言う仲だったって。

中学の時の二人の関係は俺たちの今と似ていて。彼はボクシングをし、彼女はそれをサポートする。

ただ大きく違うのは、彼女は畠山に軀さえ提供していたって事だった。

彼女。

つづく

### 第三話 契約（前書き）

痛くて、寒くて、生々しいです。

どんどん酷くなるので、苦手な方は御退出をお願いします。



### 第三話 契約

中坊のセックスなんて。チエリーな俺が言うのも変だが、それって立ちションするのと変わんねえんじゃないのって思った。出すもの出すだけ。別にうらやましいとも思わない。むしろ汚ねえって感じ。する事の無い落ちぶれた馬鹿ガキが大人のふりしているだけだつて。

彼女はそれをしていた訳だ。

勇利の軀はお世辞にも女らしくない。骨と皮と筋肉。女に見えるかと言われても正直困る。むしろセックスとは限りなく無縁って感じだった。

その軀で男を受け入れた？

嘘だと思った。

でも彼女の手は握りこぶしを硬く握りその肩はわずかに震えていて。勇利は辛いとき拳を握る癖が有る。

嘘だと思いたかった。

俺の部屋で二人向き合いながら

「畠山の事、今でも好きなのか？」

恐れていた質問をした。彼女は首を横に振ると、俺にちらっと目線をくれた。

「好きじゃない。正確に言うと、そう言う意味で好きだった事は一度も無い。」

俺達の間で冷えた空気が流れた。

彼女は畠山を利用する為に、好きでもない男に抱かれていたんだ。そして彼女が次のターゲットに選んだのは俺だった訳だ。

自分が出来ないボクシングをしてくれる、お人形。ＪＩ ジョーみたいな。足を走らせ、手を出させ。

はははは。

俺は口が渴くを感じた。

「じゃあさ、俺が勇利にお願いしたら、お前は俺に抱かれるのか？」  
彼女は黙ったまま、一層頭を深く垂らした。彼女は答える事が出来なかった。

目一杯怒りに満ちていた俺はそれ以上考えられる余裕なんか無くて。

「言えよ、ほら。」

俺は彼女の短い髪の毛を掴み上を向かせた。勇利の顔は苦しみで歪んでいただけ、俺も同じような顔をしていたに違いない。

「それで俺が練習に打ち込めるって言ったら、どうなんだよ！！」

そのとき俺は腑に落ちた。なるほどな。彼女が自分の名前を嫌悪した理由がよく分ったって感じた。

何しろ自分が営業していたんだから。

でも本当は否定して欲しかった。俺たちは特別で、あんなヤツなんかどうでもいいって。今の彼女はあの頃より大人で、俺とは心でつながっているって言って欲しかった。肉体なんて、物でしかない。

「基がそうしたいなら。」

彼女が呟いた。

俺は啞然とし、手のひらから髪の毛が逃げた。

そして用意していたって分る台詞を言ったんだ。

「コンドームは絶対だぞ。」  
って。

それから細長くて見た目より軽い箱を俺に手渡した。

「いいか、覚えとけよ。その時の俺はダッチワイフだからな。感情とか反応とか、期待すんなよ。この部屋を出てまで関係するのも無しだ。その時の俺はお前の知り合いですらないんだからな。」

冗談だっと思って欲しかった。

本気で彼女を抱きたい訳じゃなかったから。でももう引き返せなかった。

歯を食いしばりきつく眉を寄せる彼女がどんな気持ちでそれを言ったか手に取る様に分ったから。

それはある意味親友としての究極の選択だったと思う。

“ 受けて立つ ”

それ以外無かった。勇利がその犠牲を払う覚悟なら、俺だってそれに応えて勝ってやると覚悟を決めた。

「オツケー。」

これは、契約だ。

「俺たち恋人同士じゃないから。好きな人出来たらキレイに別れような。」

箱を受け取った俺に彼女は小さく笑ってみせた。

彼女。

つづく

#### 第四話 喪失（前書き）

甘い恋愛の話では有りません。ご注意ください。

よくあるキーワード “らぶえっち” とは “レイプ” “奴

隷” とは異なる意味で、

真逆なストーリーです。

## 第四話 喪失

うつむく彼女をベッドの端に座らせ、おそろおそろシャツのボタンを外す。

圧迫するタイプのスポーツブラが現れつくづく不思議な気分だった。

“ 抱かせる ”

と言った割には俺の軀の反応はイマイチで。

服を脱がせるのにちつとも協力してくれない彼女に、ああ、人形なんだって、ともすれば萎えそうだった。俺の初体験は人間じゃないんだって。

これは取引なんだからって。

俺の知識なんてせいぜい友達の家で見たAV ぐらいなもので、フツーにどうすれば良いのか分らなかった。

彼女は何の反応もしない。

“ 止めよう ”

でも無ければ先に戸惑うに俺を馬鹿にするでもない。

続けるしかなかった。

とりあえず肩に触れ横にし、それから胸元へ指を這わせる。

彼女の左右に広がった小さな乳房が呼吸にあわせて震えていた。

ああ、生きているんだって俺は少し嬉しく感じた。その事に気を良くし、シャツを放り、ジーンズを脱ぎ捨てゆっくりとその上に被さる。

肌と肌がすり合わさり、その瞬間、これなんだってこの時産まれて初めて分った。これが男と女って事だって。

世界が開けた、そんな感じた。

ベルベットみたいだった。ごつごつした男の俺の軀とは全く違う。温かさと、弾力と。胸に押し当たっている彼女の先端が硬くなり、俺の軀にスイッチが入る。それは溶け出しそうな快感。

初めて重なる勇利の軀は想像していたよりずっと柔らかかった。わずかにかけた体重に反発する軀。彼女ののどの奥から小さな声が漏れ

「重いのか？」

って俺は聞いた。勇利が首を振るからそのまま体重をかけた。

ほんの10分前の俺と今の俺はまるで違う生き物だった。本能が教えていた。どうすれば良いかを。

肌という肌の全てが触れ合う様に俺は動いた。指先で曲線を味わい、唇でなぞる。日焼けした首筋と、真っ白く日に焼けていない胸のコントラストが眩しかった。

「キレイだ……。」

俺は本心からそう思った。不思議なくらい気持ちが高ぶって、考えられるのはただ目の前の軀だけ。

熱くなった腹の底が、早く前進しろと急く。

それでもなかなか上手くつける事の出来ないゴムに俺は焦った。それ以上におかしくて

「俺ってもしかして不器用？」

って笑っていた。目の端で彼女の少し大きな口元がニツて動いた気がした。

俺たちは何をやってんだろう。

そう分ってはいんだけど止められなくて。

彼女の全然濡れていない中心に重なった。

シートをつかんでいる両手に力が込められ全身が硬く締まり、彼女が唇をかむから、痛いつてこと、分った。

でももう止められない。

俺はそのまま軀の中の膿を吐き出した。彼女に向かって。

彼女が俺に抱かれた理由は二つ。

俺がボクシングだけに打ち込める様に、この年頃にありがちな欲望の捌け口になる為。

それと多分、罪悪感だ。俺のライバルと寝ていたって事への。

分かっていた事だ。

それでも俺はこの契約で失うものなんて無いと思っていた。お互い手に入れる事が有り、俺たちは上手くやっていける、そう思い込もうとした。

彼女。

つづく

## 第五話 修復

世の中のほとんどの人間には理解できないかもしれないが、俺たちの関係はほぼ完全に元に戻っていた。

俺は普通にしている限りあいつに女を感じるでも無く、あいつが俺を男として意識しているとはとても思えなかった。

俺たちは1年の頃から互いに

“女房殿”

“だんはん（旦那様）”

と呼び合っていて、それすらも変わらない。

普通に肩を抱き合い、笑っていた。

以前から彼女はたまに俺の家に来て夕飯を作ってくれていて。

トレーナー様曰く、飯は高タンパク、低カロリーが基本だそうだ。勇利の母親は水商売をしていて、食事はいつも彼女が作っていたらしい。俺の家で作ったものの半分を持って帰れば良いだけだから特に大変じゃない、そう言って笑った。

何しろ俺の両親は仕事の都合で北海道に暮らしていて、兄貴との二人暮らしだったのだ。男所帯の、しかも兄貴は激務のサラリーマンで俺はこんなだし。ほとんどまともな飯はカレーぐらいしか食えなかったから、勇利が飯を作ってくれるのは兄弟揃って願ったり敵ったりだった。

とにかく彼女の作るものはなんでも美味かった。みそ汁でも握り飯でも煮魚でも。

特に面倒くさいと滅多に作ってもらえなかった豚角は天下の一品で、料亭接待で舌の肥えているはずの兄貴でさえも唸って食っていた。おかげで食料費供給の名目でたつぷり小遣いをせしめる事が出来た。

そして夕飯の仕込みが終わり、後は飯が炊きあがるだけ、という段階で俺は彼女に



「抱きたい。」

とさえ言えば良かった。

それから先の1時間、俺たちは別の世界の住人になった。

俺はお人形遊びを。彼女は俺がインターハイで優勝する夢を見る。

そうしているうちに冬になり、俺は部の初詣というその日女子マネの亜由美にみんなの前で告白されたんだ。

「つき合っている人、いないんですね？お試してもいいからつき合って。それから決めてもいいから、ね？」

正直戸惑った。

勇利とこんな関係でありながら、新しい彼女作るのかつて。

別に亜由美の事が好きだった訳じゃない。正直言うと何の感情も無かったから。

でもその時の勇利の顔は笑っていて

「やるなあ、基。」

という声が聞こえそうだった。だから承知した。

俺が正式な彼女を作ればもう勇利と寝る事は無い。それがお互いの為の様な気がしたからだ。

これで俺たちは普通の親友に戻れる。そうどこかで安堵した。

そのくせ亜由美とつき合いながら奇妙なほど勇利と比べ、ほんの数ヶ月前を懐かしいと思った。

亜由美はどこで仕入れてくるのかその手の情報に長けていて。仕草、テクニク、勝負下着。オーラルだって彼女からして来たぐら이다。可愛らしいおねだりポーズで積極的な亜由美。

勇利は絶対にしなかった事のオンパレード。

俺は気持ちよくそれを受け入れた。

だからむしろセックスだけの事じゃ無い。

二人肩寄せ合い下校しながら見た夕焼けや、勇利が台所に立ちカウンター越しに俺に話しかける声の響きや、彼女が家にいる時の明

るい雰囲気を出していた。

亜由美とソファでいちゃこきながら、同じ所に座りながら勇利と観戦した昔のタイトルマッチを思い出したり。

情熱的な彼女を抱きながら、切なく堪える勇利の幻がちらついた。そして出来るなら、もう一度勇利を、そう願う様になっていた。

勇利を取り戻すのは簡単だった。

何しろ彼女にとってボクシングが全てだったから。

亜由美と別れ、彼女にこう言うだけで良かった。

「俺は勝ちたい。だから協力してくれ。」  
と。

そして俺たちの関係はあつという間の元に戻ったかのように見えた。  
相変わらずダッチワイフな彼女。

彼女。

つづく

## 第六話　ダッチワイフ

以前と変わらない関係。

そのはずが、俺は何かが違うと気づき始めた。軀の付き合いが長いと、彼女の癖、というか、自分の感じ方というのが分つて来て。

勇利の骨に当たる感触、軀の向き、柔らかさ。そう言ったものをしっかり味わいながら抱く事を覚えだしていて。

だのに彼女は一向に変わらない。

申し訳程度に潤い、喘ぎ声一つ漏らさず、微動だにせず。

勇利だけが感じないなんて、おかしいって思った。

そんなある日、ドラックストアのゴムの棚の近くに置いてあったそれを見つけた。

“心も体も温かく触れ合いたい方に”

なんてパッケージには書いてあつて。恥ずかしいなんて考えもせず、そのくせかこの一番下にソレを押し込んでいた。

それをただ寝ているだけの彼女を見下ろしながら手のひらに取った。

ふわりとライムの香りが漂う。

いつもと違う気配を感じたのか、彼女がはつと上半身を起こし、バランスを崩したそれは俺の手のひらをすべり勇利の引き締まった下腹にぶちまけられていた。

「やつ……何？」

粘りのあるところとした液体がぬめりながら下へと向かつて流れ出す。

慌てる彼女を体重で押さえ込んだ。

「心配するなよ。変なもんじゃねえし。」

べとべとに汚れたボトルとキャップを拾い蓋を閉めそれを彼女に渡

した。

「お前、ダッチワイフだろ？ダッチワイフには必要なんだよ、こういうのが。」

それはラブローション、つまり潤滑油。

「少しは楽しめよ。」

俺は自分の下半身を使ってそれを彼女の軀になすり付けた。透明のジェルが奇妙なほどてかっていた事を覚えている。

彼女は押し黙り目を閉じるとボトルを枕元に放り、両手で顔を覆った。

その肩が辛いつて言ってた。本当は俺に抱かれたくないのにつて。だって、仕方ないだろう？これは契約なんだから。

それにいつもお前が帰った後、シーツ洗うのが嫌なんだよ。血の滲んだシーツをさ。

俺が下手だつて事分ってるけど。俺ばっか気持ちよくて、お前は痛いだけなんて。

こんな俺だけど、それでもやりただけのガキみたいにながつつと抱くのだけはしたくなかった。

彼女はダッチワイフかもしれないけれど、掛替えの無い親友でもあったんだ。

俺の中でもややとした感情が渦巻いていた。

それがすつきりと晴れるのはしばらくたってからの事になる。

抱かれている勇利はまさにダッチワイフそのものだった。

意志の無い軀は俺の望むように体位を替え、嫌を言わず受け入れてくれる。足を広げようと膝の裏から手をかけると、例え蠟人形のようなわずかな抵抗が有ったとしても、無駄な力を加える必要もなくゆるゆると開いた。床へと引きずり降ろし、後ろ向きにベッドに向かわせても文句も言わず。

それから、俺の体に腕をまわす事も無かった。彼女の掌はいつでもシートを掴んでいて。触れているのはいつだって俺以外のものだった。

キスすらも。

「口、開いて。」

って俺が言わない限りその奥を見せる事が無い。舌を絡めようにも、そこはぽっかりとした穴が有るだけ。彼女の意志のかけらなんて一つも見つからなかった。

それが約束だと俺は自分に言い聞かす。

それでも俺は、手のひらに当たるちいさなふくらみを必死になつて愛撫していた気がする。

彼女から得られる反応は、唯一終わつた直後に俺を押し退ける事だけだった。

俺は汗だくでいつも彼女の上で果てていた。

彼女にとって重いってのは分っているけど、この時だけは許して欲しかった。

なにしろ勇利を抱くのはいつだって死にそうなほどトレーニングした後で、その上全身の力振り絞ってその行為に及んでいた訳で。

俺の体力もねじ切れそうだった。

荒い息を吐きながら俺は夢と現の狭間を浮いたり沈んだりした。

その時だけ、彼女は自分から動く。俺の下から逃げようとし両の手で俺の胸に触れる。最初はそつと優しく。指先で軽くさわる様にそれから手のひらがみっしりと当たり、強く押す。

その瞬間俺の意識は急速に浮上し、体重を加減しながら彼女には絶対にばれない様にその手の感触を味わった。

「うう。」

とか言っただけにも寝ぼけているかを装いながら。

彼女の指が俺の胸元をかすめる。少しの隙間に引っかかり爪が立

たる。上手くいけば困っている彼女の半開きの口元が肩に当たり、柔らかな唇の内側の感触に痺れる事が出来た。

それから寝返りのふりで彼女を抱きしめる。

反応が遅れ彼女の両手が俺の肩に回る。背中を伝うその指先に鳥肌が立った。彼女は俺の意識が戻っている事に気がつき、諦めた様に手を広げ再び人形に戻って行く。

それは俺が勇利を人として抱いていると実感できるたった一つの時間だった。

彼女。

つづく

## 第七話 代償（前書き）

ジャンルは文学に位置づけています。

文中から作者の意図が正確に伝わる様に書けていることを願っています。

## 第七話 代償

そんな日々が続いた葉桜の季節、その日2回目の行為に至った時にそれは起きた。

彼女の反応がいつもと違っていた。心無しいつもとより潤い、時々その両足が何かを蹴る様に動く。そんな事は初めてだった。

さすがにその頃になるとゆとりも出てきて、どうすればダッチワイフを演じているはずの彼女が反応を示す様になるのか僅かながら分るようになっていて。

その時の彼女はいつもの様に下唇を噛み締めながら、でも微かに唸り、突然シーツを手放し両の拳で顔を覆った。

「・・・・うっ！」

彼女のキツく閉じられた口腔からうめき声が漏れる。彼女は逃げる様に身悶えた。

「勇利！！！」

俺は嬉しさのあまり叫ぶ。そして、強く！！

「いやあっ！！！」

その小さな叫び声とともに彼女の体は大きく反り返り、打ち震えた。全身に電気が通ったようだった。俺の視界を血管の浮き出た彼女の拳が遮っていた。同時に俺の胸に何とも言えない暖かい物がこみ上げてくる。そつと勇利の顔を覆う手をどけて、表情を読む。

「・・・・？」

彼女は何も言わない。ただ泣き出すんじゃないかって思うほど苦しそうな顔で俺を見上げると、素早く目を逸らした。

「・・・・たんだな。」

俺は情熱に身を任せた。彼女の両手首を掴み、ベッドに張り付け、気が狂ったかの様に！

「！！！！！！！」

今まで聞いた事も無いような喘ぎ声が漏れ、堰を切ったかの様に彼



女が溢れ出し、有り得ないほど絡み付き、滑らかに身をよじらせた。

終わった後、俺達はしばらく抱き合ったままで。

彼女はいつもみたいに逃げ出せずにいた。

この時俺は気づいた。本気でこいつの事を好きなんだって。彼女が感じて、初めて俺の心が満足を覚えた。

抱く。出す。それだけじゃ駄目なんだ。

体重ねて、心重ねて愛し合う。俺にとって勇利と交わすこの行為は愛そのものじゃなきゃいけないんだって。俺の腕の中で彼女が応えてくれないと意味が無いんだって。

涙を誤摩化そうとする勇利の唇にそつと口付けすると、彼女は血の味がした。

もし俺がもう少し出来た人間だったらこの関係に終止符を打つ事が出来たかもしれない。彼女の為に。心と軀を自由にしてやる事を。でも頭で分っている事と感情や欲望は一致なんかしないんだ。彼女は咲き始めたバラの蕾だった。匂いたちもうすぐ花ほころぶ事が分っているのにどうして手放す事が出来る？

俺の軀の下にいる彼女は、俺が咲かした花だった。その始まりをどうして野に戻す事が出来る？

もしかしたら俺がこの時点で告白をしていたら状況は変わっていたかもしれない。でも俺は彼女に気持ちを告げる事さえしなかった。恋人としての俺を拒絶されるのが怖かった事も有る。

でもそれ以上に、もし今の時点で彼女が俺を受け入れ本当の恋人同士になったとしたら、この行為を始めた根本的な意味が変わってしまうと思ったからだ。

愛したい、愛し合いたい！いくら俺がそう望んでも、彼女に應える為に俺がまずしなければいけないのは、勝つ事だから。

一番最初に犠牲を払ったのは彼女で、その痛みには報いなければいけない。

だから俺は勝ち続けなければいけなかった。

俺達の関係はそれから変わらなかった。

ダッチワイフ。

セックスフレンドにも満たない、そんなセックス。

彼女を抱けば抱くほど、俺の心は空洞のようになった。それでも、彼女との約束は果たさなければいけない。

ひたすら、ボクシング。

不思議な事に、ボクシングさえしていれば勇利の事を忘れられた。たとえ彼女がそばで声援を送ってくれていたとしても。

だから俺は俺なりのやり方で彼女を愛した。

「ゆーり」

それ以来俺はダッチワイフの彼女の名前をその音で呼んだ。いつもの

“ユーリ”

の音じゃない。やわらかく

“ゆーり”

だ。

好きだと言えないから。愛していると言えないから。せめて名前だけでも、と。

現実には、俺の一方的な愛だけが空回りしていたなんて気づかずに。

皮肉な事に、結局俺との関係に疲れぼろぼろになった彼女は安息の地へと逃げ込むかの様に他の男と恋に堕ちてしまい、俺たちは高校卒業と同時に全く別の道を歩く事になる。

その男は寒気がするほどの “ 出来過ぎ君 ” 世の中の男の天敵の様なヤツだった。

俺たちより6つ年上のそのエリートサラリーマンは、身長180cm の長い手足にウイングチップとポールスミスのスーツを身につけて。酒を飲んでも飲まれる事は無く、愚痴さえ言わず、人の話を良く聞き。暇ができると

「他にいく所も無い。」

からとスポーツクラブに通う。厳しい割には寛大な性格で、誰に対しても態度を変える事が無く。端正なお顔立ちはいつだってクール、艶のある声はいつも穏やか。唯一兄貴が声を荒げる事が有るとすれば、勇利を相手にする時だけだった。

正直、忘れる事は出来ないけれど。でもその想いを乗り越え今の俺がいる。

彼女。

エピソードへ つづく

## エピソード

「もとちい、おなかすいたあ。」

ぼんやりと昔を懐かしんでいた俺の服の裾を息子が引っ張り、わくわく、と言った目で俺を見上げていた。

俺の嫁は料理がからつきし駄目だった。今でこそ食えるものを作る様にはなったものの、やっぱり俺の作る料理の方が美味しい事に変わりはない。

今日のメインは豚角煮。塩で炒めたチンゲンサイと息子が剥いたゆで卵を添えて。

「ママには内緒な。」

俺はほろほろになった肉の一切れを裕也の口に入れてあげる。すると「裕也、良い事教えてあげる。それね、もとちいの初恋の味なんだよ。」

嫁がカウンターの向こうから声をかけた。

「美味しいでしょう。」

彼女はにやにやと笑い俺をからかう。

俺の過去を知って勇利を忘れなくても良いと言ってくれたのは彼女だ。恨み、憎しむのではなく、俺同様、勇利も必死だったって事をむしろ暖めるものだ。

俺は彼女に救われた。

その事に涙がこぼれそうになる。

彼女は自分以上に俺を理解してくれていた。

俺たちが過ごした時間は決して無駄じゃなかったんだと、結果はどうあれ、全力で生きていた輝いた季節だったんだと初めて自分を納得させられた。

「無駄な恋愛なんて無い。それが有って、今の自分があるんだから。」

つき合う前の嫁はよくそう俺に話して聞かせた。今ならその意味がよくわかる。

「お前がもう少し大人になったら、作り方教えてやるよ。なにしろお前の “ もとちい ” は天才だからな。」

皿を運びながらそう言っていると、息子は晴れやかな顔をした。

「うんっ！ママより天才！」

「いらん事、子供に言っなあ！」

いらぬことを言った本人がそう吠える。

「罰。ご飯終わったらハーゲンダッツ買って来て。ストロベリーとバナナね。」

つわりの落ち着いた嫁は良く食うようになり、以前にも増して笑う様になった。

そして彼女の笑顔に、今の俺は支えられている。

彼女。

F i n

## エピソード（後書き）

もう一度読んでみたい。そう思って頂ける作品を書けていたら良いな、そう願います。

読み難い話だったと思います。

ここまでおつき合いいただきありがとうございました。

廣

瀬 流が留

あの、良かったら感想ください・・・、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8989d/>

---

彼女。

2010年10月9日15時45分発行